

氏 名	<b>COUSINS Marcel (カズンス マルセル)</b>		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第 34 号		
学位授与日	平成 23 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	<b>Coded mediums Contemporary art in relation to mass production, media and appropriation.</b> <b>(コード化された表現手段 大量生産、メディア、アプロプリエーションとの 関係から考察する現代アート)</b>		
審査委員	主査 教授	本 江 邦 夫	
	副査 教授	西 嶋 憲 生	
	副査 教授	堀 浩 哉	
	副査 森美術館 チーフキュレーター	片 岡 真 美	

## 内 容 の 要 旨

当論文は、大量生産、メディア、そしてアプロプリエーションの観点から現代アートを考察するものである。中でも、特にテクノロジーの発展が、どのように私たち人間を取り巻く世界のコード化の仕方に影響を及ぼしたか、そして私たちはどのような記号や、シンボル、そして環境の中で生きているのかという問題に焦点をあてる。さらに、このような体系が私たちの世界の見方やその中で役割に対してどのように作用するのか。この問題はメディア知覚、言語体系、記号学、文化的アイデンティティに対してのアプロプリエーションの影響、社会構造、権力体系、風景の知覚、そして現実の表象といった観点から論及される。現在、「実在」は現代社会のイメージ世界と同一線上に置かれている。この断片化したイメージ・ベースの世界は、私たちの周りにある物の見方にどのような影響を及ぼしたのだろうか。バーチャル・リアリティに基づいた環境はどのような結果を招くのだろうか。私たちの日常生活の実存性と実体感に関する喪失感が、シミュレーションと私たちがさらされているメディア等に構成され、意味付けられた知覚に取って代わられている世界。今日私たちは、合意の上に成り立っている伝統に関する教化よりも、マスコミ文化のイメージや商品を通して社会化される。技術の飽和が周りの世界の見方と接し方に深刻な影響を与えている現在、その中で制作活動するアーティストたちに如何なる作用を及ぼすのだろうか。

私の研究は、現代の消費者文化におけるイメージや物の大量生産に注視するものである。そして、これらのイメージや物がメディアによってどのように表現され、さらにアートの作品の意味を生成し、定めるために用いられるアプロプリエーションやコンテクストを利用するといった手法とどのように関わっているのかを明らかにしていくものである。

破壊的であると同時にアイロニーも含む活動の中で、私はテクノロジー（生産、コミュニケーション等）の飽和が私たち個人や社会全体に対してどのような影響を及ぼしているのかを視覚的に探るために、様々なテクノロジーを駆使している。その意味では、後期資本主義における機械の役割の進化についてだけでなく、同時に機械を取り込み、それを通して創り出すことが可能となる私たち自身についての物語性や寓意性を追求していると言える。私が取り組んでいるのは、一見異質に見えるイメージや、パターン、そして物を選び出し、組み合わせ、さらにそれらに合った質感、トーン、そして構成を施すことによって、（様々な文化的背景を持った）個人やコミュニティの現代的都市生活の組織的複雑性や積層の表現にしていこうことである。

位置付け：私の活動における商業生産方法の利用

- ・超高速の情報ハイウェイは、過去には想像できぬ速さでA地点→B地点までたどり着くことを可能にした。情報入手の効率性に焦点を当てたことは、そのプロセス自体を見落とすことに繋がるのみならず、私たちが接触する形あるものは満足感を呼び起こし、思考の糧になるということを私たちに忘れさせた。しかしこの情報とエンターテインメントの流動は、社会的分裂と人間同士の接触の断絶という結果も招いた。アートは、私たちの交流を妨げる障害を特定するだけでなく、それを除去するための一つの方法である。

- ・私の作品が採用するスタイルは、時代のニーズに呼応するものであり、現時点で利用可能である周りにある全ての材料や技術を利用するものである。制作過程は、常に変化し私の活動と共に進化している。結果的にこれは反スタイルのようなものを生み出す。多くのアーティストは、一つのスタイルを選択し、区別しやすい連続性を持った作品を制作するためにそのスタイルの枠組みから離れようとはしない。これは確かにあるアーティストの作品の市場を生み出すための独自性を醸成することには繋がるが、創造的過程と逆行するものである。既に発見されたものを使用し、それらを適合させ、再編成し、歪曲するということは、その物体のスタイルを乗っ取り自分のものにするということに等しい。意識的な選択プロセスを通してある一種のスタイルは生まれるが、このスタイルは物と物の間との関係、そして絵画や、彫刻、インスタレーション等への転置から派生したものに過ぎない。これは、後期モダニズムの独自性と自己表現の追求とは、全く異なる過程なのである。

- ・消費文化、日常的に使う物や周りにあるイメージは、集合的無意識の貯留槽として機能

する。こういった物事を摂取し、引用するということは、この集合的無意識を活用することに等しい。この戦略は分析的アプローチに由来するものであり、自然と自然界ではなく、文化を主題として扱うものである。

## 審査結果の要旨

現代美術の作家が自分自身の表現を客観的に眺め、さらなる発展を望むとき、どうしても歴史的な考察が必要となります。歴史的にまったく新しい表現などどこにも存在しないからです。第三者から見ると、そのような手続きないし作業は、自明のことをただなぞっているようにも見え、どこに独自のものがあるのか分かりにくいのがふつうですが、本人はいたって真剣であり、またそこから何か新しいものが引き出されてくることが無いわけではありません。美術教育の現場を見ていると、よく歴史的な名作を追体験するような授業がありますが、これも同様の趣旨のもとになされているのでしょう。これは本論文で言及されていることではありませんが、かつて和光大学で学生たちが関根伸夫の幻の（というものは現存しないからですが）名作《位相＝大地》の再制作を試みたことがあり、大地から土を掘り出し、それを高さ 2.5 メートルの円筒状にまとめることがいかに大変で危険を伴うことであるか身をもって実感したことがあります。これは歴史的な作品を模写することを考えてもよく分かることです。要するに、傍から見ていると分かりきったようなことでも、この種の「歴史をなぞる」過程には当人たちにしか分からない「何か」が必ずあり、そこに独自のもの、つまり客観的に見た新しさが無いからといって、そうした歴史的再検証の試みを全面的に否定するわけにはいかないということです。

なぜ、このような回りくどい言い方をするかというと、オーストラリア出身の、アプロプリエーション（流用）を主とする現代美術作家カズンズ・マーセルさんの英語による提出論文『コード化された表現手段』（Coded Mediums）についても同じことが言えないわけではない、つまり「この論文のどこに新知見があるのか？」といった疑問を発することが大いに可能であるからです。実際にも副査の一人からそのような指摘がなされました。これが理論系の学生の論文であればそれは致命的な打撃となったでしょうが、ここにあるのはあくまでも具体的な素材にかかわるアーティストが自分の目と手をとおして、つまりその身体性によって感じ考えたことの成果であり、そこにかけがえのない価値があることを忘れてはなりません。

「コード化された」というのは、私たちの高度に発達した資本主義による現代社会が大量生産によって幾重にも記号化され、階層化され、本物と模造品の区別が曖昧になり、かつてあった本物の絶対的な優位が——たとえば最近の美少女ロボット未夢（ミーム）が与えた衝撃を見ても分かるように——少なくとも美的な意味においては揺らいでいる事態を見据えた言い方です。マーセルさんによれば、「テクノロジーの進歩は私たち人間が周囲

の世界をコード（暗号）化するやり方、つまり記号とか象徴に影響を与え、私たちが暮らす環境をも変えてきた」（「要旨」）わけですが、これ自体は目新しい主張でもなんでもなく、ほとんどクリシェ（常套的な言い方）であることは言うまでもありません。しかし、これ自体がまたしても常套的と言わざるをえませんが、「アウラ」のベンヤミンとシミュラクル（摸像）の大御所ボードリヤールを援用しつつなされる具体的な記述、あるいは類例化にこの人ならではの取り合わせの妙、ときに閃きが見られる点は大いに評価すべきでしょう。

マーセルさんの言う「現実とイメージが隣り合っている」現代社会ではイメージによる現実（真実）の誤魔化し、改変といったものが頻繁に見られます。フィリップ・モリスがかつて、タバコは健康の敵という非難をかわすために、いかにもアメリカ的な自由でたくましいカウボーイのイメージ（これ自体がハリウッド映画による一種のブランド化です）を援用かつ利用して「マールボロー・マン」なるイメージを拵え上げ、同名の煙草を売りまくったのはよく知られた話です（かつこいいカウボーイを演じた、つまりさんざんマールボローを吹かした役者は3人とも癌で死んでいます）。そのときに使われた写真を「流用」して名をなしたのがリチャード・プリンセスですが、この件にかんするマーセルさんの記述はなかなか精彩に富んでいます。「プリンスは道徳的な判断をやり過ごすことなく、一連のイメージがどのように機能するか、そのメカニズムと、そこに孕まれた矛盾を際立たせる」（p. 56）ことに終始したはずだったが、その結果つまり作品がオークションで高値をつける皮肉を、彼はけっして見過ごしていないのです。

『コード化された表現手段』の構成は次のようなものです（節については省略します）。

第1章：さまざまな表現手段とそのメッセージ

第2章：21世紀の美術

第3章：アプロプリエーション（流用）のさまざまな方法

第4章：位置決め

第5章：結論

この配列から具体的に見えてくるものはほとんどありません（この印象は節をすべてあげても変わらない）。ここにあるのは、悪い意味での抽象的な構成です。そして、こうした抽象性、見通しの悪さは全体を通じて一貫しており、けっしてエレガントとはいえない文体もあいまって、本論文の無視し難い欠陥となっています。

とはいえ、「流用」のアーティストとして活動するカズンズ・マーセルさんが自らの芸術的出自を辿った本論文には、批評家の言説には見出しがたいリアリティ、現場の感覚とも言うべきものがあり、この点は大いに評価すべきものと考えます。